

鯖 江 城 築 城 計 画

吉 田 純 一

Building Plan of Sabae Castle

Junichi YOSHIDA

Akikatu Manabe who was the seventh lord of Sabae clan was allowed to build up his castle by the Tokugawa shogunate at the eleventh year of Tempo (1840) in Edo era. His retainers got ready to build the castle at once. But this plan was stopped in the middle, Sabae castle was not built really.

This paper makes clear that they intended to build the Sabae castle from the top of the Chosenzi mountain to its south foot.

1. は じ め に

鯖江藩は間部詮言の越後村上から西鯖江への転封によって享保5年(1720)9月に成立した。当時の西鯖江村は越前国内の幕府領を統治する陣屋があったものの、家数わずか27戸、村民200人余の貧村であり(註1)、当初は家臣たちの住居にも事欠くありさまで、城下の建設は困難を極めた。しかしそれからほぼ8～9年後の享保14年(1729)6月頃までには城下もどうにか整備されたようである(註2)。その様子は城下古図(註3)に窺えるが、誠照寺の南隣に藩政の中心になる御館を構え、その東を南北に走る北陸街道に沿って町屋が並び、その東側の一画が武家屋敷地であった。したがって鯖江は城下町とはいうものの、天守がそびえる城郭をもたない無城の城下町であり、町の形態も城郭を中心として武家屋敷がそれを取り巻くように配される近世の一般的な城下町とはやや異なっていた。

ところが7代藩主の間部詮勝の代に、幕府より築城の許可を得、鯖江藩は開藩以来120年余を経てようやく城をもてるようになった。藩ではさっそく築城の準備に取り掛かった。しかし諸般の事情もあって、城の建設は計画の段階に留まり、実現には至らなかった。

本稿は鯖江市資料館をはじめ各所に伝わっている資料を検討しながら、このまぼろしに終わった鯖江城の築城計画の様相を明らかにする。

2. 築城の許可とその背景

鯖江市資料館には間部家が西鯖江に転封される以前の宝永元年(1704)から明治4年(1871)までの170年間にわたる『藩庁日記』や『御用状』を集めた718冊にも及ぶ間部家文書が保管されている(註4)。これらのなかで主要な文書は『間部家文書』として順次刊行されているが、『同 第

四巻』所収の天保11年(1840)5月7日付の御用状に次のようにある。

「一、於御杉戸内御側目付相詰左之通申渡之

御番頭々御用人格迄

殿様(詮勝)先月廿八日被為召御登城被遊候処、於御座之間鯖江御城地御拝領、

御城御取建可被遊為蒙仰候間、可被得其意旨

」

つまり鯖江藩が幕府から正式に築城の許可を得たのは天保11年(1840)4月28日のことであった。そして5月29日付の御用状には

「一、於御杉戸内御側目付相詰左之通申之

御番頭々御用人格迄

殿様(詮勝)当月十九日御登城被成候処、今度御城地御取建ニ付而金五千両被

遊御拝領候間、可被得其意旨

」

とあって、それから21日後の5月19日に5,000両もの大金を下賜されている。越後から鯖江への転封はいわば左遷であり、開藩以来、無城のままで、冷遇されていたわずか5万石の小藩が多大な恩恵を受けたのである。これは間部詮勝の幕閣での功績に因るものであろう。彼は文化元年(1804)に生まれ、6代藩主詮允の死去にともなってその養子となり、わずか10歳で藩主の座に就いた。そして文政9年(1826)に奏者番を拝命して初めて幕政に関与し、その後は表-1に示すように、天保元年(1830)、26歳で寺社奉行見習となり、翌年同加役に昇進、そして同8年に大阪城代に就き、その翌年には京都所司代に栄転、

表-1 間部詮勝の略歴

さらに天保11年1月13日に西丸老中職、大御所家斉付となり、ついに幕閣の最高位に昇りついたのである。わずか15年程の間における詮勝のこのような昇進ぶりは幕閣における彼の有能さを如実に物語るものであろう。しかも老中職に就任した際、城主格となって城持ちの大名に認められ、それからほぼ3ヵ月後に築城の許可を得たのである。

なお築城の許可は家臣や領民たちにとっても大きな喜びであったようで、7月11日には城地拝領の祝儀として大津町の町人宇野七兵衛が金五百疋を献納しており(註5)、

文化元年(1804)	2.19	詮勝、生まれる(詮熙の3男)
同 11年(1814)	9.22	6代藩主詮允が死去し、その養子
同 11年(1814)	9.22	6代藩主詮允が死去し、その養子 となって7代藩主に就く(10歳)
文政 9年(1826)	6.17	奏者番を拝命する(22歳)
天保元年(1830)	11. 8	寺社奉行見習となる(26歳)
同 2年(1831)	5.28	寺社奉行加役に昇格する(27歳)
同 8年(1837)	7.20	大阪城代となる(33歳)
同 9年(1838)	4.11	京都所司代に昇進する(34歳)
同 11年(1840)	1.13	西丸老中(大御所家斉付)(36歳) 城主格に任じられる
同 14年(1843)閏9.21		病気のため西丸老中を解任される
安政 5年(1858)	6.23	再度、老中職に就く
同 6年(1859)	12.24	同職を辞任

8月1日から6日にかけては詮勝 ※『続徳川実紀 第二巻』、『藩史大事典 第三巻中部編I』

の老中昇進と城主昇格の祝い事が相次いでなされている(註6)。

3. 築城の準備状況

藩では金5,000両を拝領した翌日(5月20日)にさっそく年寄職の間部司馬を築城御用掛りに任命している(註7)。この司馬を総責任者として築城の準備や計画が進められたのであろう。

今日残っている諸史料から築城の準備状況を窺うと、まず城普請の用材調査が上げられる。当時、鯖江藩領であった稲郷村(大野市)や東角間村・西角間村(ともに池田町)あるいは杉尾村(今立町)などには材木書上帳(案内帳、改帳)が残されている(註8)。これらはそれぞれ村内にある樹木の材種や大きさなどを1本ずつ細かく書き留めたもので、表紙の外題は違っているが、「御城普請」の添え書きが共通にみられ、さらに年紀はいずれも天保11年8月であるから、これらの帳がこの時の築城に関わるものであることは疑いない。

また武生市の三田村家からは最近『天守図』がみつかった。これもこの計画に関わるものとみられることはすでに報告した(註9)が、概要を示せば次のようになる。つまりこの図は慶長6～11年(1601～06)に結城秀康がつくった北庄城(福井城)天守をもとにして書かれたものと思われる。年紀は「天保十二年丑七月中旬」とあってこの時期より1年ほど遅れているが、三田村家は当時から地元の有力な大工家であり、当家の先代が大工としてこの築城に関与していたことは十分に推察でき、この『天守図』が鯖江城の建設に際して参考図的な意味で作成された可能性が高いと判断できるのである。

さらに城地の選定や縄張調査などを裏付ける史料もある。『間部家文書 第四巻』の天保11年9月21日条に

「一、左之通相届出之

酒井修理大夫様御家来 宮田源左衛門

此度御城御取立ニ付縄張等御頼ニ而只今到着仕候旨

但右到着ニ付大目付江茂得其意候様手附之者を以為達之」

とあって、小浜藩主酒井忠義の家来である宮田源左衛門に縄張を依頼したこと、そして彼がこの日(9月21日)に鯖江にやってきたことがわかる。続いて

「 十月十八日

一、酒井修理大夫様御家来宮田源左衛門儀、今般御城築御縄張御頼ニ付当方江着、以後御場所等再応見分之上御縄張御絵図出来ニ付、近々爰元出立いたし候間、今日八ツ時過ゝ右源左衛門并悴登・孫金三郎、植田頼母宅江相招、間部勘十郎・植田頼母・間部司馬・松本要人罷出、左之通被下候旨勘十郎申述之

宮田源左衛門 羽二重三反

今般御縄張御頼被成遠路御太儀ニ思召候、無程御出立之趣ニ付乍麓末御送り被成旨、但兼而江戸表ゝ被仰付越候

宮田 登 羽二重二反

宮田金三郎

羽二重一反

とある。これは調査を終えた宮田源左衛門らを家老職の植田頼母宅に招き、その労苦をねぎらい、お礼として羽二重を贈ったことを示すものであるが、①城地や縄張の調査は10月18日ころまで続いたこと、②この調査をもとに縄張絵図がつくられたこと、③宮田源左衛門の倅(登)と孫(金三郎)もこの調査に同行していたことなどがわかる。次項に述べるように、鯖江城の縄張絵図も残っている。ともに宮田源左衛門らの手でこの時に書かれた絵図そのものではなさそうであるが、これらの図から彼らの城地選定案や城郭の縄張計画を窺い知ることができる。

4. 城地と縄張計画

(1) 2葉の縄張絵図

鯖江城の縄張を示した絵図は、旧藩士の青山家所蔵(鯖江市資料館に保管)のものと家老職も勤めた田代家所蔵のものが知られている。図-1が青山家蔵の図で、「徳川十二代家慶將軍治世天保十一年庚子間部家代八世詮勝公被蒙封邑築城之余依而城地実測図 旧鯖江藩文学芥川舟之所蔵 明治十九年十二月廿六日模写 青山善治藤原利器」との端書があり、鯖江藩文学の芥川舟之が所有していた絵図をもとに青山善治が明治19年(1886)に書き写したものである。大きさは南北55.5センチメートル、東西39センチメートル。彩色があり、山を濃緑色、道を赤色、河川を濃青色、誠照寺を茶色とし、山には樹木も描いている。城郭に関しては堀を青色、塀を薄茶色で表わしている。ただし建物はとくに表現されていない。

いっぽう図-2は田代家蔵のもので、東北部分に欠き込みがあるものの東西153センチメートル、南北が東辺で226センチメートル、西辺で165センチメートルの大きな図である。山は薄緑色、街道沿いの町屋は黄色に塗られている。城郭部分は無彩色であるが、堀を幅広の白紙を貼って示し、その片方の端に太線で塀を描いている。そして、その線と細線の間が石垣であろう。そして門や一部の建物は簡単な姿図で示している。このほか城郭の周囲の主要な地点間の距離も記されている。題名や添書などが無いために筆者や作成時期、由来などはわからないが、堀などを貼紙で示していたり、主要地点間の距離を書き込んでいることからみると、実測図あるいはそれに類する図をもとに作成されたものと考えることができる。

(2) 城地について

どちらの図でも中程から北方(図の上方)にかけて山が描かれている。名称はみられないが、この山は今日、西山公園として整備されている標高110余メートルの長泉寺山である。そして山頂から東南方向に張り出している部分はとくに東山と通称されている。この北にみられる小さな円い山は茶臼山である。高さ10メートルほどの小さな古墳で、現在、鯖江市図書館と同資料館がたっているあたりに存在していたという(註10)。この茶臼山と東山の東側を南北に通っているのが北陸道である。そして図の南半にあって、この街道の西側にみられる2つの大きな敷地は、北(上)の方が誠照寺(図-1では黒くみえる)、南(下)が藩役所や藩主の居館があった御館である。北陸道は現在もほぼ当時のままで、誠照寺も同じ位置に存する。御館はすでになくなっているが、旧

所在地あたりは屋形町と呼ばれ、町名にその名残りを留めている。

後述するように2つの図は城郭部分にやや違いが認められるものの、城地は同じで、長泉寺山から南へ下がる傾斜地と東南に続く東山とその丘陵を利用し、これらを南や東、西から取り巻くように堀や石垣、塀を設けて防御を固めるように計画されている。現況に置き換えれば、西山公園の展望台がたつ頂上あたりから東は旧北陸道あたりまで、南は誠照寺の背後あるいはその西方の嚮陽会館あたりまで、西は長泉寺山の西麓あたりの地域を城郭地として計画していたことになる。

(3) 城郭の構成と縄張りの様相

次に城郭部分の構成や縄張についてみる。これらの様子は両図でいくらか違っているが、まず青山家所蔵の図-1からみると、長泉寺山の山頂や南下がりの傾斜面および東山へ続く峰づたいに合計11箇所の平坦地がある(図の白い部分)。このように地形を利用しながら小さな曲輪を階段状に設ける形態は中世の山城によく似ている。そして山麓の東から南さらに西にかけてこれを取り巻くように、複雑に細かく曲折した堀や塀と石垣で囲まれた3つの曲輪を設け、それからさらに南へ張り出してもう1つ曲輪を構えている。したがって城郭部は、東は北陸道を越えてその東方まで延び、南は誠照寺の背後からさらにその南の御館までつながっている。

建物はとくに描かれていないが、曲輪の隅部にみられる白い、四角い部分は櫓がたつ場所とみてよい。また堀沿いの内側の石垣や塀で囲まれた四角い部分は櫓形と呼ばれ、その入り口には門を構えるのが通例である。とすれば少なくともこの図では7つの櫓と櫓形の入り口の5つの門を想定できる。なお誠照寺の真西にあたる最も大きい櫓形が城郭の正面入り口で、ここに大手門がたつものと思われる。この櫓形の前の堀には橋がかかっている。現在の嚮陽会館のあたりである。ただしこの図では天守や城内の主要な建物については形態はもちろん、たつ位置さえわからない。

いっぽう、田代家所蔵の図-2にみられる城郭は、図-1よりもやや小規模であり、曲輪の堀や石垣も直線的である。たとえば山上の曲輪は長泉寺山の山頂と東山に1ヵ所づつみられるだけで、山麓の曲輪も東山の南麓の三角状の大きな曲輪と南下がりの傾斜地の南から西麓を取り巻く曲輪があるだけで、東や南、西への広がりも小さくなっている。なお後者の曲輪は図では9棟の建物がある一画と西麓に張り出す一画がそれぞれ独立した曲輪のようにみえるが、これは南西部分の堀や石垣を示す白紙が欠損しているためである(註11)。

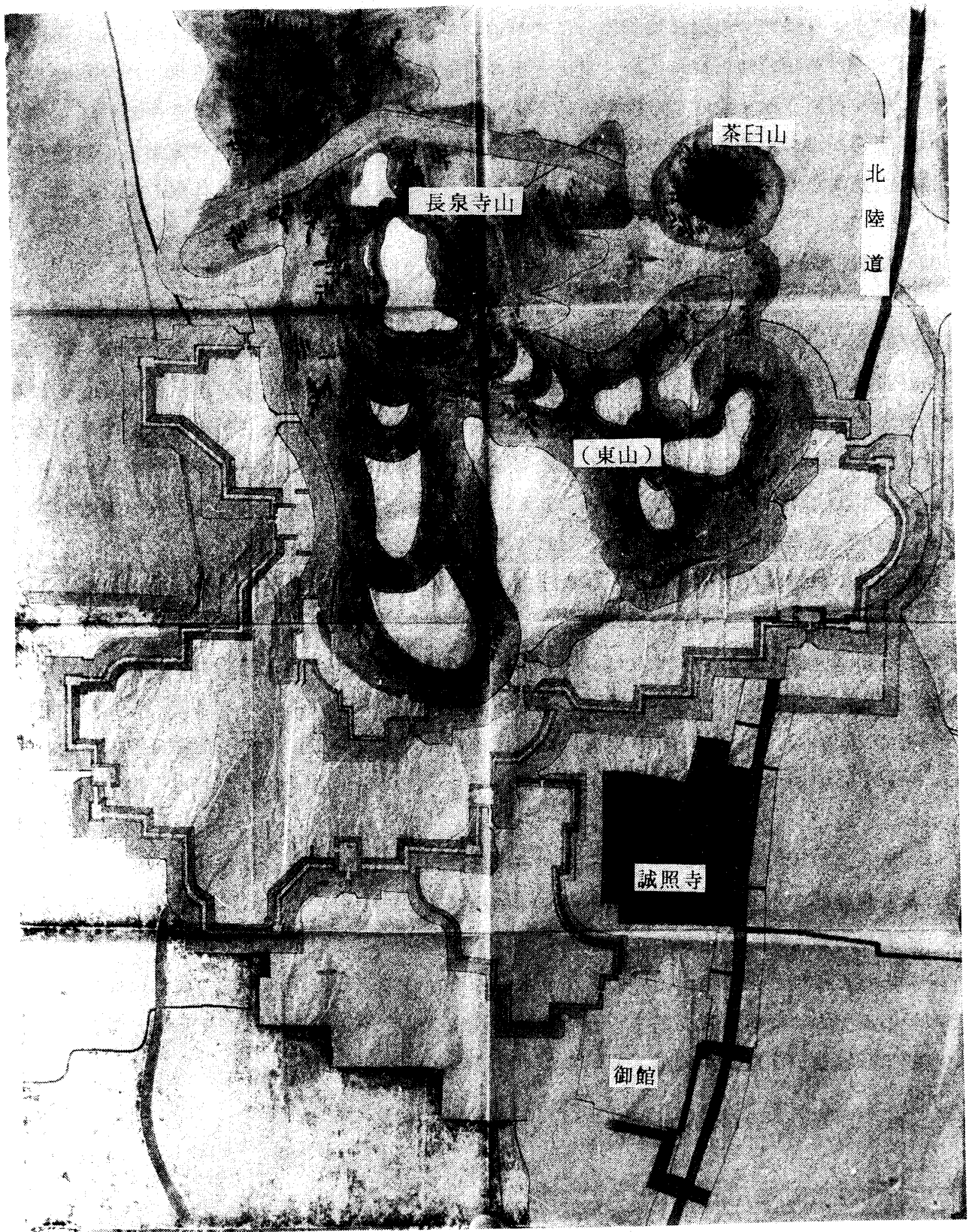
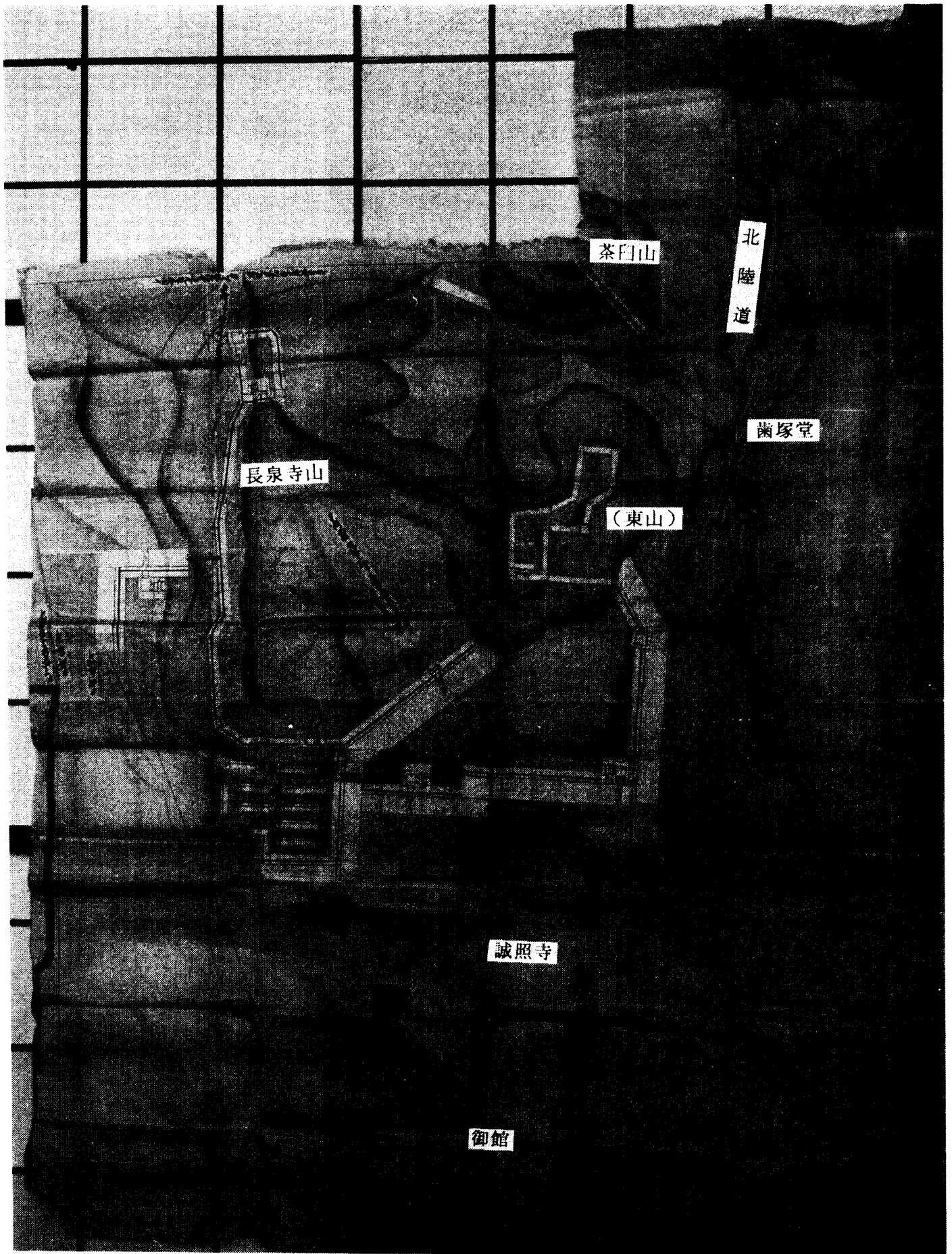


図-1 鯖江城縄張絵図(青山家所蔵, 鯖江市資料館保管, 55.5×39cm)

※名称は筆者が書き入れたものである。



図－2 鯖江城縄張絵図(田代清痴家所蔵、226×153cm)

※名称は筆者が書き入れたものである。

ただし建物や曲輪の様子は図-1よりもやや具体的に想定できる。前述のように堀と石垣は白い貼り紙で、門は姿図で示されるほか、櫓や塀は四角や黒線で示されている。まず長泉寺山の山頂付近の曲輪は周囲に石垣と塀を廻し、南側に櫓形と門を構え、北西隅に櫓をたてている。この位置は現在、展望台があるあたりで、長泉寺山の最も高いところである。こうした地形を考慮すると、この一画が本丸に相当し、北西隅の櫓は天守とみることができる(註12)。これより大きめの東山の曲輪は周囲を石垣積みとし、南に門を設けている。そして櫓を東辺の石垣中程に乗せ、北の一画に1棟の建物がみられる。これを住居とすればこの曲輪を御殿がたち並ぶ二の丸にあてることができよう。山頂と東山の間は柵で、南下がりの傾斜地は尾根づたいに石垣と塀を設けて防御し、これらを背にして南に開く谷状の平坦地(註13)は、傾斜地の南端から東山の南西麓に直線状の堀を設け、石垣や塀を築いて塞いでいる。

東山の前方南から中央に設けられている三角状の大きな曲輪は東辺の北寄りに櫓をたて、南東隅と南辺にそれぞれ櫓形を配している。南辺の櫓形はその位置からみて城郭の表正面入り口と思われる、ここが大手門の位置と考えられる。その前にみられる半円形のものは台紙に直接描かれているが、堀であろう。南から西麓を取り巻く曲輪にみられる9棟の細長い建物は米蔵など、貯蔵用の施設であろう。また南下がりの傾斜地の西麓の一画は、西方の防御を固めるもので、北辺に櫓形付きの門を設けている。したがってこの図からは城郭全体で天守とみなされるものを含めて4つの櫓と櫓形にたつ4つの門を想定できるほか、東山の曲輪に1棟、南西麓の曲輪に9棟の建物がみられ、さらに石垣や塀の中程に付設する門も6つ確認できる。

以上のように両図に示されている城郭は曲輪の構成や堀、石垣、塀などの形態、また櫓や門をはじめとする建物の様相などに相違がみられる。これが何に起因するのか、どちらがより事実に近いのかなど即断はできない。ただし両図や地形などを総合して考えると、長泉寺山の山頂付近に天守を核とした曲輪(本丸)を構え、東山に住居施設を中心とした曲輪(二の丸)を置き、長泉寺山の丘陵を防御に利用しながら、これらの麓を東、南、西の三方から取り巻くように堀や石垣、塀を廻して防御を固めようとした縄張の計画を推察することができる。



写真-1 長泉寺山遠望(南西方向より)



写真-2 長泉寺山の南麓付近

(4) 城郭の規模

先に述べたように図-2にはいくつかの地点間の距離が記されている。たとえば長泉寺山から茶臼山へは「峰境より茶臼山迄凡百八拾貳間斗」とあり、茶臼山から南東方向へは「茶臼山峰より齒塚堂迄百三拾間斗」とある。前者の峰境は長泉寺山の山頂を意味し、後者の齒塚堂は図の位置とほぼ同じところに現在もたっている齒塚大権現を指すものとみてよい。茶臼山は現存しないが、先述のようにもとあった場所がわかるから、これら3地点を地図におとし、その間の距離を測ると、それぞれ図の数値に近い値を得ることができる。したがって図に記されている距離はほぼ信頼でき、これらの距離と図面上の長さの比率をとると、この図はほぼ4,500分の1の縮尺で描かれていることがわかる。この縮尺に従って城郭の規模をみると、東西方向は東の北陸道から西に張り出す曲輪までがほぼ340間(約620メートル)、南北方向は長泉寺山の山頂から誠照寺の北辺あたりまでが360間ほど(約655メートル)になり、広さはおおよそ12万坪余に及ぶ。また本丸とみられる長泉寺山の曲輪は、東西が23間余(約42メートル)、南北が39間余(約71メートル)で、広さが約900坪余になり、さらに東山の曲輪は1,500~1,600坪ほどの広さになる。

5. 結 語

鯖江藩は7代藩主間部詮勝の功績により、開藩以来120年余を経た天保11年(1840)になって築城の許可を得た。幕府から5,000両の準備金も下賜され、藩はただちに御用掛役人を決め、領内の村々に対して普請用材木を調べたり、小浜藩から宮田源左衛門を招いて城地の選定や縄張調査を行なうなど、築城の準備・計画に当たった。先に掲げた2葉の縄張絵図は曲輪の構成や堀や石垣、建物の様子などが異なっているが、両図を総合して考慮すれば、鯖江城は北方にある長泉寺山の頂上から南下がりの傾斜地や東南に続く東山を中心とし、これを東、南、西の三方向から取り巻くように堀や石垣、塀を廻して防御を固めるように計画され、長泉寺山を核にして東が北陸道のやや東まで、南は誠照寺あたりまで、西は長泉寺山の西麓あたりまでを城域として想定していたことを指摘できよう。

しかしこのような計画がなされたものの、鯖江城は実現しなかった。『鯖江市史 第三卷』所収の「鯖江城地=付内談書」(註14)には「(前略)鯖江之儀者兼而願面=申立候通他領入交り至而手狭=而武備者勿論水之手悪敷、是迄之姿=而者連茂城築難相成、猶領分之内=而城築簡易=出来候場所茂有之候ハ、場所替之儀相願度、領分中為取調候処別紙絵図面之通山奥谷間等=而城築之場所無之候 (後略)」とあって、他藩の領地や幕府領が交錯していたりして領内に十分な広さの城地を得られないことや、水の便が悪いことをその理由に上げている。本稿に掲げた2葉の縄張絵図でも城郭の東端は北陸道や町屋、さらにその東の武家屋敷にまで及んでいて、手狭ぶりが窺えるであろう。また城郭の建設には農民たちの労働・使役が必須の条件となってくるが、当時は大飢饉のために農村は極端に疲弊し、農民たちは困窮のどん底にあった(註15)。立地条件とともにこうした社会状況も鯖江城の築城を妨げる要因になったものと思われる。

(註)

- 1) 『問部家文書 第一巻』(昭和55年)所収 享保5年 29番文書
「一、鯖江村家数二十七軒・人数貳百人余有之、牛馬者無之不宜村ニ相見ヘ候由(後略)」
- 2) 問部詮言は鯖江に入ることなく死去し、その跡を継いだ詮方が初めて鯖江に入部したのが享保14年6月5日である。これに間に合うよう御館や城下が整備されたと思われる。(『問部家文書 第二巻』)。
- 3) 田代清痴家所蔵『越前鯖江之絵図(安永二乙年三月十七日写)』
- 4) 『問部家文書 第一巻』 解説の項
- 5) 鯖江市資料館所蔵『藩庁日記』
「 天保十一年七月十一日 晴
一、左之通御勝手御用人申出之
御肴料 金五百疋 白木台 大津町人
御熨斗包 宇野七兵衛
今般御城地御拝領被遊候付御祝儀差上候旨 」
- 6) たとえば『藩庁日記』の天保11年8月2日条に次のようにある。
「一、左之通御書付申渡之 大目付御側目付江
追々御昇進被遊其上御城主被為蒙仰候為御祝儀明後日四日左之通(後略)」
- 7) 『問部家文書 第四巻』(昭和61年)
「 五月二十日
一、御小書院於御下段御側目付相詰左之通申達之
(年寄)問部司馬 麻上下
今度御城御取建ニ付御用掛リ被仰付
- 8) 土蔵市右衛門家蔵『御用木内改帳(御城御普請御用木書上ゲ帳) 天保十一年子八月日 稲郷村』
赤谷吉衛左門家蔵『御城御普請御用木書上帳 天保十一年子八月日 東角間村』
飯田家蔵『御城御普請御用木書上帳 天保十一年子八月日 西角間村』
角野嘉十郎家蔵『御城御普請御用木御案内帳 天保十一年子八月日 杉尾村』
現在、材木帳が確認できるのは以上の4ヵ村だけであるが、この調べは領内の各村になされたものと思われ、ほかの村でも同じような材木帳が作成されたであろう。
- 9) 拙稿「三田村家蔵『天守図』について」 福井工業大学研究紀要 第19号 1989
- 10) 鯖江市教育委員会編『王山・長泉寺山古墳群』(昭和42年)のなかに茶臼山古墳の記述があり、その位置も確認できる。
- 11) 南麓の一画に貼られている白紙の左端と西麓に張り出す一画の白紙の下端はともに途中で切れていて不自然である。しかもこの両端をつなぐように紙と同じくらいの幅の細い線が2本みられる。したがってここにも堀や石垣が設けられていて、この両区画が南麓から西麓を取り巻くように、一つの曲輪として計画されていたことがわかる。
- 12) 近世城郭において天守は郭内の北西隅にたてられるのが最も一般的である。この点からもこの位置に天守を想定できる。
- 13) 図-1に「是所西鯖江持分并木林茅場共六千貳百坪斗 内貳千貳百坪畑地」とある。
- 14) 植田知代次家所蔵『鯖江市史 第三巻 諸家文書』(昭和63年)所収
- 15) たとえば『藩史大事典 第三巻 中部編I』(平成元年)によると、天保8年(1837)2月には領内の飢人9,170人に粃62俵余を与えたとある。

※ 謝 辞

本研究の遂行ならびに本稿の作成にあたって、鯖江市資料館ならびに田代清痴・忠昭家には資料の閲覧や撮影そして掲載に関して多大の御協力、御厚意を得た。また鯖江市立図書館や植田知代次氏、竹内信夫氏にも種々お世話・御教示をいただいた。末尾ながらこれら各位に厚く感謝申し上げる次第である。